

# 2016 年度「哲学カフェ in 有瀬」事業報告

松井 吉康

## 序

自由な空気の中で立場に関係なく討論をするという哲学カフェの特長を活かして、学生に「問題発見能力」と「不特定多数のメンバーの中で自分の考えを発信出来る能力」を身につけさせようというのが、本計画の第一の目的である。こうした能力は、大学に留まらず、社会人として身につけておくべき重要な能力である。本計画では、そうした能力を身につけさせるために、専門を異にする複数の教員たちが、専門外のトピックに対してどのような問いを立て、どのように議論を展開していくかを実際に目の当たりにしてもらい、その後、そうした問いを学生自らに発してもらう機会を設け、そこからさらなる議論を展開するようにリードした。ただし学生の中には、そうした討論形式に入り込めない者もいるので、休憩時に、Wi-Fi タブレットを通してネット上の掲示板に疑問や意見を提出してもらう時間を設定するようにした。それら様々な意見を電子黒板 BIGPAD で共有し、次の討論に繋げることで、討論参加へのハードルを下げ、不特定多数を相手に自分の考えを発信する訓練を積んでもらうよう誘導したわけである。また教員も、他の教員のアプローチを目の当たりにすることで、互いの専門についての理解を深め、自らの授業への取り組みのみならず学問そのものへの態度までも反省することを心がけた。

以下に記すのは、このような目的と意識を持って開催された 2016 年度哲学カフェの開催データと参加者（学生並びに教員）の評価をまとめたものである。

## 1 開催データとアンケート結果

2016 年度は、当初の計画通り計八回の哲学カフェを開催した。また同様の試みをしている常葉大学と連携し、常葉大学で合同哲学カフェを開催した。2016 年度教育改革助成金の協力メンバーは、人文学部人文学科所属（2016 年当時）の松井、桑島紳二、平光哲朗、金益見、福島あずさである。この五名は、CM（コアメンバー）と表記する。以下に 2016 年度に開催した八回の概要と参加者からのアンケート回答のデータを掲載する。アンケートは、匿名（ハンドルネーム）回答で、質問項目は次の通りである。

- ① これまでの参加回数（今回も含む）
- ② 今回の哲学カフェは、あなたにとって意味のあるものでしたか？  
 とても意味があった      意味があった      意味はなかった
- ③ 今回、発言出来ましたか？  
 よく発言した      まあまあ発言した      少し発言した      発言しなかった
- ④（発言出来なかった人に）発言したいと思いましたか？  
 思った      思わなかった
- ⑤ 発言出来なかった人、しなかった人は、その理由を教えてください
- ⑥ タブレットなどを用いて意見を発信しましたか？  
 発信した      発信しなかった
- ⑦（今回、意見を発信出来なかった人に対して）どういうやり方なら発信出来ると思いますか？
- ⑧ 今回の哲学カフェについて、自由に意見や感想を書いてください

ここでは紙幅の関係上、上記の中から②と⑥の回答結果を掲載し、⑤と⑧については後述する。

表1 2016年度中の哲学カフェ開催日時と概要

回数	開催日時	テーマ	提題者	参加数 (教員)	参加数 (学生)
第1回	2016/4/23(土)	言葉が生み出すもの	松井	6	15
第2回	2016/5/28(土)	愛って？	金	4	20
第3回	2016/6/25(土)	科学的であること、 科学的ではないこと	福島	8	15
第4回	2016/7/16(土)	私が私であること	三田牧 (人文学部教員)	5	12
第5回	2016/10/22(土)	名画ってなに？	橋本啓子 (本学元教員)	4	7
第6回	2016/11/27(日)	『女らしさ』って？ 『男らしさ』って？	松井	3	6
第7回	2016/12/18(日)	身近なところから考 える『宗教』	五十嵐真子 (本学元教員)	10	11
第8回	2017/2/4(土)	キャリアってなに？	桑島	6	12
出張	2017/2/9(木) 2017/2/10(金)	「教育」を軸とした 議論 (テーマ決めず)	本学 CM 5名	常葉大教育 学部教員 10～15名	常葉大教育 学部生 5～10名

表2 各回の参加者によるアンケートの回答結果

回数	回答数	回答：「参加してとても意味があった」	回答：「参加して意味があった」	回答：「参加しても意味はなかった」	回答：「タブレット等で意見を発信した」
第1回	15	5	9	0	10
第2回	20	12	7	1	7
第3回	15	9	6	0	9
第4回	11	7	4	0	0
第5回	7	4	3	0	1
第6回	5	3	2	0	0
第7回			実施出来ず		
第8回	12	3	9	0	0
出張			実施出来ず		

表1のように学生の参加は、少ない時で6名、多い時で20名、平均すると12名程度で、定期的に参加している学生（レギュラスチューデント、RSと表記）は5～6名だった。もちろん、CM以外の参加は、学生や外部からの参加も含め、完全に任意である。時間設定は、たいてい、13時開始、16時半終了、途中で30分の休憩というパターンで、最初に提題者から15分から20分程度の話提供があり、その後は自由な議論という形で行われた。意見を口に出来なかった人、話し足りなかった人などのために、休憩時間に、タブレットを使って、ネット上の掲示板（「哲学カフェ in 有瀬」<http://6810.teacup.com/cafephilo/bbs>）に意見を書きこんでもらうようにしていた。後半の開始時に、そこに書き込まれた内容を見て、議論を深めるためである。

表2で「参加して意味がなかった」と答えたのは全体でただ一人、一回だけで、それ以外はすべて「非常に意味があった」（43名）「意味があった」（40名）と回答している（ちなみに「意味がなかった」と回答している学生も、別の回では「意味があった」と回答している）。どういう点に意味を感じたかに関して自由記述欄⑧で一番多かった意見は、「色々な人の意見が聞いて良かった」（10名）であった。RSの一人、M（ハンドルネームの頭文字、以下同様）は、「大学になれば自然と増えると思っていた議論の機会はむしろ高校生の時に比べて減っていて、大学で真剣に話し合うといっても、同世代とばかりであったり、またはそこまで深いテーマでなかったり、意見がぶつかり合うこと自体がほとんどありませんでした」と書いている。異なる意見を聞いて自分の考えが相対化されて初めて、問いが生まれる。そういう意味で、異なる意見との出会いは、問いを発する最初の一步である。参加した学生達は、「自分の当たり前」が、「他者の当たり前」とぶつかることで、「当たり前が当たり前でなくなる」という経験をしていたのである。

## 2 定期的に参加した学生と教員の成果

こうした第一歩を踏み出して、さらに参加する回を重ねていくと、学生は、次第にこちらが発言を促さなくても発言し、時には教員の発言に対して積極的に意見を言えるようになる。また話題となっている事柄から離れることなく、議論の流れをしっかりと掴みながら発言が出来るのも彼らである。これらの点に学生が問題を的確に把握する能力の向上が見られる。RS五名に、哲学カフェ全体に対するコメントを求めたところDは次のように書いている。

最初は何を話せば良いのか分からず、教員の話すことを聴くことが多かった。だが、議論が進むにつれて言いたいことが頭で膨らみ、発言してみると様々な意見が返ってきた。その時に、それぞれの職業などは関係なく参加者が一個人として議論していることを体感した。自身や参加者の「意見」や「考え」にこれまでの個人の背景があり、一つ一つの言葉に重みがあったのだ。

ここでDは、「他者の言葉の裏に個人の背景があり、一つ一つの言葉に重みがある」という気づきを得ている。自分とは異なる意見が、単に違うだけでなく、重みを持つものであることが分かったのである。他者の言葉が自分の言葉と同じ重みを持つことを知ること、そこから翻って自らの意見が相対化される。「自分の当たり前」が揺さぶられて初めて「どうなっているのか?」と「分からなくなる」のであるが、それは、問いを発するための第一歩である。同様にSUは、

自分が出会ったことがない考えをもった同世代の人と、先生の補助を得ながら話し合えるのが大きかったです。例えば「……」という反対意見を貰った時は衝撃を受けましたし、自分にない発想だったので刺激になりました。さらに、授業や講義でお世話になった先生ともくだけた雰囲気でも議論を交わしたり、休憩中に意見交換を行うことが出来たりするのもよかったです。(……)

哲学カフェでは講義のような形式でなく全員が発言出来るため、たとえ先生の意見でも「でも私は違います」とその場で意見を表明し、それに関して先生の考えも伺えます。

と、異なる意見との出会いに衝撃を受けたこと、教員との距離が近くなって議論が出来るようになったことを重要な成果だと述べている。ほとんどの学生にとって教員は、圧倒的な相手であり、権威でもあるので、教員相手に「自分の意見は違います」と言える学生は、そう多くはいない。面と向かってそう発言するためには、「なぜ?」という問い返しに答えることが出来なければならないが、SUは、そうしたことが出来るようになってきたと言っているのである。同じく、教員と議論が出来ることに大きな意義を見出し、さらに自校で

それを経験した結果、学外での参加のきっかけとなったと書いているのは、前出のMである。

ここでは年齢も肩書きも関係なく、同じテーマについて考え、意見を交換する。もはや非日常で、だからこそより有意義に感じました。

最初は参加すること自体に少し勇気がいりましたが、今はそうは思いません。自分が通っている大学でそういう機会があったからこそ、同類の催しに参加する抵抗もなくなりました。

大学に高校とは違うものを期待して入学する学生は少なくない。自分自身を成長させたい、自分を磨きたいと考えている学生は、そういう場として大学を考えている。しかし「真剣に議論出来る場がない」というのは、そういった学生からしばしば聞かされる嘆きである。もちろんそういった場は哲学カフェ以外にも存在するのだが、敷居が高かったり、見つけにくかったりする。私達の哲学カフェには卒業生も参加するが、彼らも、議論の機会に飢えている。そういう渴きをいやす場所としても、哲学カフェは機能しているのである。また発信能力ということに関しては、SEが、次のように述べている。

参加当初は、人と話すことより、自分の中で問題を理解することが出来ていれば良いと考えていたが、議論に参加している内に自身のアウトプット能力が欠けていることを知った。そして、私が行っていた自分の中で理解するということがとても曖昧な状態の理解であったと知ることが出来た。(……)

哲学カフェに参加することで知識を吸収することが無上の喜びになっている自分がいた。

SEは、議論に加わることで、初めて自らの発信能力に問題があることを自覚したわけである。他者との関わり合いの中で自らの能力不足を知ることは愉快的ことではないが、そうした不足を自覚しなければ成長がないのも事実である。SEは次のステップにつながる大切な自己認識を手に入れたのだと言えよう。また、後にジェンダーについての卒論を書いたSIは、次のように書いている。

哲学カフェで扱われている題目は、答えや正解があるものではなく、そういった問題に対してどのようにアプローチをし、今後の課題を洗い出すのか、そういった議論や思考の仕方を学ぶことが出来たと感じています。(……)

「ジェンダー」の問題に関しては、(……) 個々の性別、世代、興味関心など、多くの要因によって意見に差異があったことに非常に面白さを感じましたし、そういった意見をもって議論が出来る場として哲学カフェには大きな効果があったと考えています。

哲学カフェそのものは、目に見える成果を出すものではない。しかしSIは、毎回積極的

に発言し、教員を相手にした場合でも臆することなく議論が出来るようになっていたが、翌2017年度人文学部人文学科文化コースの卒論発表会でジェンダーについて発表し、教員と学生の投票の結果、最優秀卒論に選ばれている。発表に続く質疑応答でも、教員からの質問に対し前もって準備していたかのように答える事が出来ていた。こうした成果が、すべて哲学カフェによるものだとは言えないが、SIが哲学カフェで鍛えられ、そこから重要な学びを得ていたことは確かだろう。

また本計画開始当初、参加者の数が多く、発言が一部の学生に限られるような場合、多くの意見がタブレットで寄せられていたが、そこには真摯に問題に取り組んでいることが分かるコメントが数多く見られる。回が進むにつれてタブレットの利用者は減っているが、それは、参加者の多くが発言することに慣れていったことの裏返しである。また休憩時間にタブレットで書き込んでもらっていたのだが、その時間帯も周りの人間と話す学生が増えたということも、タブレット利用者が減った理由のようである。

「教員への効果」に目を向けると、哲学カフェの成果として、CMの一人、金は「学生と同じ高さ、同じ温度で物事を考え抜く時間のなかで、現代社会への処方箋を作れたこと」を挙げ、さらにその処方箋が「思考停止の処方箋を作る」ことであったと述べている。「思考停止」という表現で金は、先へ先へと追い立てられる現代社会において「立ち止まって考えてみる」ことの大切さを指摘しているのである。同様に、哲学を専門とする平光は「われわれ教員は、時に訪れる沈黙の時間を恐れることなく、彼らが語りだすのを待たなければならないことを改めて学んだ」と述べているが、「立ち止まること」も「待つこと」も、答えを出すことを目的としない哲学カフェだからこそ出来ることである。平光はさらに「教員たちが、専門性の枠組みを超え、同じテーマについて忌憚なく自らの見解を述べ合ったことは、知的な連帯と学問的自由の空気を、教員たちにもたらした」と述べているが、CM中唯一の理系教員であった福島も「分野の異なる先生や学生たちとの議論のなか、さまざまな視点を学ぶことが出来『凝り固まった考えの自分』に気づかされるようなことが頻繁にあり(……)自分の学問分野への責任と自負が予想より遥かに強まっていたことを、初めて自覚」したと述べている。またキャリア教育が専門の桑島は、「(ファシリテーター役とは)別の教員がトリックスターとして『ぶっちゃけ本音トーク』を行い、固まった場をかき混ぜ、誰でも自由に発言出来るような楽しい雰囲気を一気に作り上げることがけっこう重要である」と述べて、自身がその役を買って出ている。各自が学生への教育的配慮ということが一番の関心事にしていたからこそ、忌憚のない意見が出せる自由な雰囲気が作られたのである。実際、同様の試みをしている常葉大学との合同哲学カフェでは、CMがそれまでの経験を活かし、相手校であるにもかかわらず、議論を引っ張ることが出来たのだが、そこでは常葉大学の学生が本心を吐露して涙を流すという場面もあり、向こうの教員がそれに驚くということもあった。つまり他校の学生が心を開くような瞬間を作ることが出来たのである。

2016年度の哲学カフェに参加した教員は、(CM以外に)人文学部八名、経済学部一名、学外(本学元教員)二名である。これだけの教員が参加すること自体、予想しなかった成

果であるが、彼らのほとんどは、普段の講義では見ることが出来ない「個人の顔」を見せていた。アンケートの自由記述欄⑧には、「いつもとは違う教員の顔が見られて良かった」という意見が少なからず見られたが、こうした機会を増やせば増やすほど、教員と学生の距離が縮まるということである。哲学カフェという自由な空間は、教員と学生の関係そのものをも変える力を持っているのである。

### 3 問題点の反省

本計画が直面した一番の問題は、学生の参加者が一定しないということであった。当初は、様子を見に来る学生が一定数存在したが、段々減っていき、参加する学生の数を増やそうというCMの取り組みもうまくいかなかった（第七回で増えたのは、五十嵐元教授が提題を担当されて、多くの教員が出席したからであり、第八回が増えたのは、提題者の桑島が、本学で話す最後の機会となったため）。本学の場合、土曜の午後にも様々な授業が組まれており、授業と重なるので参加出来ないという声は何度も耳にした。そこで開催を日曜日に変更してみたが、成果を上げるには至らなかった。結局のところ一番の障害は、単位や資格に結びつく「目に見えるメリット」が哲学カフェにはなく、それに休日の時間を費やす意義を見出す学生が少なかったということであろう。

もう一つの原因として考えられるのは、RSとそうではない学生の間、差が生まれてきたことだろう。前者は、後者にとって「良いお手本」になるが、前者が大きく成長すると、両者の差が開き過ぎてしまうのである。このことは、実際の哲学カフェでの学生の発言を見ていても明らかであった。RSは、発言することに対するハードルが低くなっており、自由に思いついたことを口に出すことが出来るのだが、そうではない学生は、議論に慣れていないため、ちゃんとした発言をしようと頭の中で文章を考えている間に議論が進んでしまい、発言の機会を逸することになりがちである（アンケート項目⑤でも、参加回数の少ない学生には、そうした感想が多い）。スポーツ同様、議論にもトレーニングが必要なのである。この問題への対策としては、カリキュラム内で議論の訓練を積んでもらうしかない。実際、哲学カフェで積極的に発言する学生の多くは、哲学カフェに来る前から、議論を積極的に行うゼミなどで訓練を積んでいた場合が多い。現状を考えると、哲学カフェに或る程度の学生が集まるようにするには、カリキュラム内で議論の訓練を積ませることが重要である。

### 今後に向けて

議論の必要性、言葉のやり取りが出来ることの必要性は、初年次教育から言われ続けていることであり、その重要性に異議を唱える者はいない。しかしゼミなどで行われる実際の「議論」は、ゼミの親しい者同士の間であれこれ意見を言って終わりということが多い。議論というのは、見知らぬ他人（もしくは意見の異なる人）を相手に行われることを

前提としているのだが、そうした訓練の場が存在しないのである。異なる意見がぶつかり合うのが議論だとすると、同調圧力が支配する場で交わされるやり取りは議論ではない。もちろんカリキュラム内の授業でも同調圧力を排した真剣な議論は可能であるが、そのためには、一方で自由に発言出来るという雰囲気、他方で知らない相手に話すかのような緊張感が必要なのである。学生の中には最初から議論出来る者もいるので、そういう学生にリードされて、学生間でちゃんとした議論が成立することもあるが、基本的には教師がそうした議論を引っ張る必要がある。学生にとって教師と議論することは、高すぎるハードルであるかも知れないが、訓練の結果、そこまで到達する学生が一定数いることは、私達の経験からも確かである。

就職活動で企業が学生に求める能力の一位に「コミュニケーション能力」が挙げられ続けて久しい。ひとと円滑なコミュニケーションを図るということは大切な能力である。しかし相手の気持ちに配慮しすぎて、空気を読むことばかりに終始すると、議論すべき時に議論が出来ないことになる。企業が求めるコミュニケーション能力の中には、「議論すべき場では議論が出来る」ということも含まれているはずである。グローバル化と言われる今日、自分の意見をはっきりと主張出来る人間を育てることは、日本社会全体にとって急務と言って良い。哲学カフェのような場が、そうした人材育成にとって有効であることは、私達の試みからも明らかである。

私達の哲学カフェは、形を変えて現在も継続中である。ただし、学内での開催をやめ、社会人などの参加がしやすいような場所で開催している。学外からの参加を積極的に受け入れているので、社会人も含め参加者の数は一定数確保出来ており、本学学生にはこれまで以上に刺激となるものと思われる。上記の反省を踏まえながら、今後も学生が自由に発言出来、自由に考えることが出来る空間を作るよう努めていきたい。